

巻頭言

「医療者用図書室」と「患者図書室」について考える

沖縄赤十字病院 院長
高 良 英 一

病院の図書室は大きく分けて医局員や医療従事者のための図書室と患者さんやご家族のための患者図書室がある。医療者用図書室は近年情報技術（information technology, IT）の進歩の影響を受けて、医学雑誌の多くが電子版に変わるなど進化しつつある。しかしながら現時点では紙ベースの書籍が大多数であり、雑誌の整理は毎年大変で、図書担当の先生は多くの種類の雑誌の製本化をするため常に発生する欠落号を探すことに難渋している。また雑誌類は製本によりコンパクト化されても全体としてはそのボリュームは増加し、すべての書籍を図書室に収納できない。その結果破棄する雑誌、単行本の選別を常に議論することになる。その点電子版の医学雑誌は都合がいい。製本も不要、収納場所も不要である。当院は電子ジャーナルへの変更は8種類と少数であるが今後は増やしていきたいと考えている。文献検索に関しては日赤図書室協議会の相互貸借システムを利用して多くの検索およびコピーの入手が可能になっている。また沖縄県内の各病院図書室間ではお互いに無料で文献のやり取りが行われている。当院は専属の図書室司書の助力などもあり文献等の複写は2012年度において前年度に

比して約3倍に増加している。各組織の図書室が連携を密にしていくことができれば各施設において医学雑誌の新規購入など蔵書が増加する可能性は減少する。このことは経済的であると同時にITの活用により最新の情報、データに接する機会がさらに便利になると期待される。

単行本についても最近はタブレット型端末の普及に伴い電子化された図書が増加したことにより、大きく、厚く、重い本を持ち歩く必要もなくなりつつある。その購入には少々費用が必要かもしれないが、急を要する判断が求められる時に常に携帯しているタブレット型端末を利用することができ、図書室へ走るより便利である。ITの進歩は時間と空間を節約させたと考える。未来の医療従事者用図書室は必要最小限度の書籍と少し忙しくなるであろう司書さんのパソコンが置かれた机を置くスペースがあれば十分なのかと想像する。

一方患者図書室はどうであろうか。新病院設計の際に患者図書室の設置をいかにするか検討していたそのような時、NPO法人「医療の質に関する研究会」（現・名誉理事長＝日野原重明先生・聖路加国際病院名誉院長）において患者図書室の設置援助プロジェクトがあることを知った。この計画は医療従事者と患

TAKARA Eiichi

者さんやご家族が病気を克服するために“協働の医療”を推進するなかで、患者さんが病気や治療への理解を深めるための場を提供することが目的である。その新しい形の患者図書室は全国50ヶ所の医療施設に設置・普及を目指した。

沖縄赤十字病院は早々にそのプロジェクトに応募し、厳しい審査を経て新病院開設と同時に患者図書室―健康への架け橋―の開設を援助していただいた。医師は患者さんやご家族にわかりやすく病状、治療計画、予後などを説明しても、実際のところは十分理解されていないことが多い。患者さんは不安を抱える中でインターネットが発達した今日でも医学情報をどこで、どのように入手できるのか、またそれぞれが必要としている情報か否かも分からないことが多い。「医療の質に関する研究会」は患者さんたちに理解しやすい書籍を選択しており、インターネット検索も可能なシステムを構築してある。さらに患者図書室

を利用する方々のためにリラックスできる環境と専属図書室司書を配置することを義務付けている。現在当院では一日平均約22名の方が外来の待ち時間や診察終了後に司書のアドバイスも得ながら患者図書室を利用している。患者さんにとっては司書の適切な指導に加えてわかりやすく書かれた活字やイラストを直接目に見ることによって病気の理解につながっている印象である。このように患者さんにご家族に対して積極的に医療関連情報を提供する場としての患者図書室を充実させることは病院の重要な役割の一つであると思う。患者図書室は「医療の質に関する研究会」が目指した医療従事者と患者・家族が病気の克服のために“協働の医療”の実践に必要な場であり今後その活用をさらに工夫、発展させるべきと考えている。

この度は日赤図書室協議会設立20周年おめでとうございます。さらなるご発展をご期待申し上げます。